平成３０年度
日南市読書感想文・読書感想画
コンクール入賞作品集
第１０集

主催　日南市教育委員会
協賛　株式会社ニチワ

はじめに

日南市第十回読書感想文・読書感想画コンクールに応募してくれた児童・生徒のみなさん、本当にありがとうございました。

このコンクールは、本を読んだから、感想文・感想画を書きなさいというものではありません。

感想文や感想画には不思議な力があります。

本は、私たちの心からいろいろな感情や考え方を引出してくれます。その感じ方を感想文や感想画で表現することは、自分の心をきちんと整理することなのです。そうすると「私は、今までこんなふうに考えていたんだ。」「これからはこういうふうに行動したい。」と、今まで気づかなかった自分に出会うことができます。これを成長と言います。感想文や感想画には自分を育てる力があるのです。

このコンクールとおして、みなさんが大切な本と出会い、健やかに成長することを心から願います。

終わりに、本コンクールを実施するにあたり、御協賛いただきました株式会社ニチワ様をはじめ、指導及び審査に際して多大な御尽力をいただきました学校教諭の皆様に対しまして、心からお礼申し上げます。

読書感想文コンクール目次

【小学校一年生の部】

金賞　みんながしあわせに
　笠　美彩都（桜ヶ丘小学校）・・・・7

銀賞　まほうのじどうはんばいき
　船ヶ山　絢音（吾田東小学校）・・8

銅賞　おいしそうなぱふぇ
　武井　彩歌（吾田小学校）・・・・9

【小学校二年生の部】

金賞　本ものの友だち
　橋本　凛音（南郷小学校）・・・・11

銀賞　「はなちゃんのはなまるばたけ」を読んで
　安田　汐里（吾田小学校）・・・・12

銅賞　「ニンジャさるとびすすけ」
　寺田　尚生（吾田小学校）・・・・14

【小学校三年生の部】

金賞　見方をかえると
　笠　煌大朗（桜ヶ丘小学校）・・・15

銀賞　みんな一しょ、だれでも主役
　後藤　彩綾（吾田小学校）・・・・17

銅賞　「友だちやもんな、ぼくら」を読んで
　守山　宗助（南郷小学校）・・・・19

【小学校四年生の部】

金賞　「かあちゃん取扱説明書」を読んで
　川越　葵生（飫肥小学校）・・・・21

銀賞　「わたしの妹は耳が聞こえません」を読んで
　田中　碧彩（吾田小学校）・・・・23

銅賞　「約束の木」を読んで
　星野　楓花（榎原小学校）・・・・24

【小学校五年生の部】

金賞　「わすれたって、いいんだよ」を読んで
　　山之口　万結（飫肥小学校）・・・27

銀賞　「青空のむこう」を読んで
　　酒井　りあ（吾田小学校）・・・・29

銅賞　「かみさまにあいたい」を読んで
　　上村　萌々香（吾田東小学校）・・31

【小学校六年生の部】

金賞　自分の時間の使い方
　　後藤　美羽（吾田東小学校）・・・33

銀賞　子どもになった祖母と私
　　重倉　あい（東郷小学校）・・・・35

銅賞　受け継いでいくもの
　　大久保　凛（吾田小学校）・・・・37

【中学校の部】

金賞　「一〇五度」の生き方
　　重永　知夏（榎原中学校三年生）・・40

銀賞　夢に向かって
　　外山　桜（東郷中学校三年生）・・・43

銅賞　毎日を大切に過ごすために
　　松浦　結菜（吾田中学校三年生）・・46

【読書感想文入選作品名一覧】・・・・・・・・50

読書感想画コンクール目次

【小学校一年生の部】

金賞　どうぞのいす
濵田　怜那（飫肥小学校）・・・・・52
銀賞　ねこのぼんおどり
柿本　絢志（潟上小学校）・・・・・52
銅賞　サイモンは、ねこである
水元　凌駕（榎原小学校）・・・・・52

【小学校二年生の部】

金賞　ミウの花まる夏休み
川添　佑珠（飫肥小学校）・・・・・53
銀賞　一日だけうさぎ
佐原　苺果（飫肥小学校）・・・・・53
銅賞　ゴマとキナコのおいもほり
米津　あおい（飫肥小学校）・・・・53

【小学校三年生の部】

金賞　ピンクのドラゴンをさがしています
鬼束　凛音（飫肥小学校）・・・・・54
銀賞　りすのきょうだいとふしぎなたね
外山　夏羽（飫肥小学校）・・・・・54
銅賞　恐竜大図鑑
谷口　琥太郎（吾田東小学校）・・・54

【小学校四年生の部】

金賞　ポリーとはらぺこオオカミ
藤井　帆奈海（飫肥小学校）・・・・55
銀賞　三年一組　春野先生！
川越　葵生（飫肥小学校）・・・・・55
銅賞　でんでん虫の悲しみ
野辺　菜月（吾田小学校）・・・・・55

【小学校五年生の部】
金賞　窓ぎわのトットちゃん
濵田　知希（飯肥小学校）・・・・・56
銀賞　蜘蛛の糸
肥田　健吾（油津小学校）・・・・・56
銅賞　ストライプ
外山　誌菜（油津小学校）・・・・・56
【小学校六年生の部】
金賞　わたしの苦手なあの子
後藤　美羽（吾田東小学校）・・・・57
銀賞　鎌倉物語
郡司　鈴実（飯肥小学校）・・・・・57
銅賞　Ｉｔ（それ）と呼ばれた子
田端　乙寧（吾田東小学校）・・・・57
【読書感想画入選作品名一覧】・・・・・・・・58
【読書感想画の審査を終えて】・・・・・・・・59
【審査員氏名一覧】・・・・・・・・・・・・・60

読書感想文入賞作品

『小学校一年生の部』

《講　評》

楽しそうに本を読んでいる姿がうかんでくる。一年生らしい素直な表現や発想に一人ひとりの個性があり、読みながら本の世界へ引き込まれる作品が多く見られた。

【金　賞】

みんながしあわせに

桜ケ丘小学校　笠　美彩都

「なくなった人がかわいそうだな。」

七月にひろしまにりょこうにいったとき、げんばくドームをみました。七十三ねんまえのせんそうで、たくさんの人がなくなったとはじめてしりました。でも、人だけではなく、どうぶつたちもつらいおもいをしたことが、この本をよんでわかりました。

この本は、うえのどうぶつえんにいた三とうのぞうのおはなしです。せんそうがはげしくなって、ばくだんがまい日おとされてきました。ばくだんでおりがこわれて、どうぶつたちがまちであばれたらたいへんなので、ライオンもトラもどくをのまされてころされました。

さいごは、三とうのぞうのばんです。ぞうは、からだが大きくて、ちゅうしゃがきかないので、えさをやらないことにしました。ぞうたちは、や

せほそってたつこともできなくなりました。わたしがしっているぞうは大きくて、どっしりしているはずなのに、ぜんぜんちがうすがたになってしまいました。よわったぞうたちが、えさがほしくてげいとうをはじめたばめんは、こころがぎゅっとなりました。おなかのなかががからっぽになったぞうたちは、とうとうしんでしまいました。

ぞうをだいじにそだててきた人たちは、なんとかたすけたかったし、ほんとうはえさをあげたくてたまらなかったはずです。

たくさんの人やどうぶつがかなしむせんそうって、こわいなあ。もうぜったいにおきてほしくないなあとおもいました。

みんながしあわせになれるように、ともだちやかぞくをたいせつにします。どのくにの人も、どのくにのどうぶつたちも、しあわせでいられますように。

【銀　賞】

まほうのじどうはんばいき

吾田東小学校　船ケ山　絢音

このほんのしゅじんこうは、こうへいというおとこのこです。がっこうのかえりみち、「あなたのみかた」とかいてあるじどうはんばいきをみつけました。わたしは、ふしぎなはんばいきだなあとおもいました。

ボタンをおすと「ピロリロリン」とおとがしてほしいものがなんでもでてきました。わたしは、

びっくりしました。カブトムシやさんすうドリルやジュースがでてきました。なわとびやゲームきもでてきました。わたしも、こんなじどうはんばいきがあったらいいなあとおもいました。

ところが、ある日、とつぜんはんばいきがきえてしまいました。わたしは、どこへいったんだろうとびっくりしました。

でもこうへいくんは、はんばいきがなくなってよいことにきがつきました。

「あのまま、はんばいきがあったら、ぼくは、なんでもはんばいきにたよっていたのかな。そしたらひとりじゃなんにもできない、ダメなおとなになっていただろう。」

わたしは、こうへいくんがきづいたのですごいなあとおもいました。このことばがいちばんこころにのこりました。じどうはんばいきには、「あなたのみかた」とかいていました。じどうはんばいきは、こうへいくんのみかたのままだけど、じどうはんばいきにたよってばかりのおとなにならないようにおしえてくれたとおもいました。

このほんをよんでわたしもなんでもひとやものにたよらないで、じぶんのちからでやるひとになろうとおもいました。

【銅　賞】

おいしそうなぱふぇ

吾田小学校　武井　彩歌

「えれべーたーがついたぱふぇって、どんなの

かな。」そうおもって、このほんをよんでみました。

じゅっかいだての、おおきなぱふぇでした。いちごぱふぇれべーたーにのった、かすてらさん、ばななさん、ばにらあいすさん、いちごさん、ちょこさん、ぐみさん、ましゅまろさんは、「わーい。」といっているみたいで、わたしはわくわくしました。

かすてらさんはにかい、ばにらあいすさんはごかい、ばななさんはななかい、ちょこさん、ぐみさん、ましゅまろさんは、じゅっかいでおりました。みんな、にこにことてをふったり、おどったりして、とてもたのしそうでした。わたしは「かわいいぱふぇができるんだろうな。」とおもって、たのしくなりました。

さいごは、いちごさんがしあげをしてくれました。いちごさんがぱふぇのてっぺんにのぼったら、すぺしゃるいちごぱふぇのできあがり。おもったとおりおおきくて、かわいいぱふぇができました。

わたしは、ぱふぇをたべたことがありません。こんど、たべたいです。このほんのいちごぱふぇみたいな、おいしそうなぱふぇがたべたいです。

『小学校二年生の部』

《講　評》

本から学んだこと、体験したことを思いめぐらせながら読み手に伝わる文を綴り、精一杯の自分なりの表現が多く見られた。また、読書によって得たことを自分の成長に生かそうとする気持ちが表れていた。

【金　賞】

本ものの友だち

南郷小学校　橋本　凛音

「なんてすてきな友だちなんだろう。」とひょうしを見て、本をえらびました。三人のくまが出てきます。白くん、黒くん、茶色くんと言う名前のなかよしぐまです。

読みながら、さいごまで楽しいお話かなぁと思っていました。ところが、あらしがおきてしまい、ボートがこわれたり、家もこわれたりして、けがをしてしまいます。わたしは、三人のなかよしぐまは、どうなるのだろうと心ぱいになりました。家がこわれたらかなしくて、さびしくなって、元気をなくすと思います。友だちのことまで考えないかもしれません。

このお話では、白くんと黒くんが、茶色くんにないしょで、こわれた家を作ってあげます。でも、ないしょにしたことが、友だちをうたがうことになってしまいます。

足をけがした茶色くんは、白くんと、黒くんが

なかよく出かけるようすを見て、やきもちをやいてイスをたたきこわします。その気もち、わたしは、分かります。でも、（友だちのものをめちゃくちゃにするのは、ぜったいだめだよ。）と、さけびたくなりました。白くんと黒くんは、もんくも言わずにへやをかたづけて、茶色くんをゆるしてあげました。わたしのよそうと、はんたいでした。何でだろう。考えたら、すごく大せつな友だちだからかな。

この本は、せかいで一ばんすてきな友だちの話だからかなぁと思いました。茶色くんは、二人から「なかまはずれにする気なんてぜんぜんないんだよ。きみの家を作ってあげたよ。」と言われて、すごくこうかいしたはずです。

わたしは、この本の白くんと黒くんのような、やさしくて、思いやりのある人になりたいです。仲のよい友だちでも、けんかをしたとき、ゆるすことを学びました。

もし、友だちがごかいをしてしまったら、せつめいして、本ものの友だちになれるようにしたいです。

【銀　賞】

「はなちゃんのはなまるばたけ」を読んで

吾田小学校　安田　汐里

わたしは、「はなちゃんのはなまるばたけ」というお話を読みました。この本をえらんだりゆうは、はなまるのはたけとは、どんなはたけなのか

なぁと思ったからです。

一ばん心にのこったのは、チェックマークの「ピン」が、はなまるの「め」だと分かったところです。

小学一年生のはなちゃんは、学校で数字の「1」がうまく書けず、ノートに「ピン」をつけられてしまいました。はなちゃんだけ、はなまるをもらえなかったので、かわいそうだなぁと思いました。はなちゃんはくやしくて、おじいちゃんにおんぶされながら、ないていました。でも、おじいちゃんがノートの「ピン」を見て、「これは、はなまるのめのしるしだな。めがなきゃ花はさかないぞ。」と、おしえてくれました。はなちゃんは、「ノートのめ、だんだんはなまるになるのかなぁ。はなまるばたけになるのかなぁ。」と、元気になりました。わたしも、はなまるばたけのいみが分かって、うれしくなりました。

わたしもテストやしゅくだいで、「ピン」をもらうことがあります。まちがえて「ピン」をもらうことは、ダメなことだと思っていました。でも、この本を読んで、まちがえても、考えたりしらべたりすることで、花のめがせいちょうするように、わたしもせいちょうするんだと分かりました。

つぎに、「ピン」をもらったときは、だんだんはなまるになるようにがんばりたいと思います。そして、ノートを「はなまるばたけ」にしたいです。

【銅　賞】

「ニンジャさるとびすすけ」

吾田小学校　寺田　尚生

ぼくは、「ニンジャさるとびすすけ」というお話を読みました。どうしてこの本をえらんだかというと、ニンジャがどんなことをしているか知りたかったからです。

いちばん心にのこったことは、すすけが、「いじめをなくすじゅつ」のところです。ある日すすけが木のぼりをしてあそんでいたら、きんぞうというお友だちがたたいてきました。

「こっちにくるな。木からおりろ。」と言われることもありました。いじめられることをなやんでいたら、おとのさまが、「いじめるものにいじめでかえすとおわりがない。やさしさでかえす。」と話してくれました。それを聞いたすすけは、じゅつをみにつけるために、いじめられてもきんぞうにやさしくしていました。ぼくもお友だちにいやなことをされることがありました。でも、ぼくもしらないうちにお友だちにいやなことをしていることがあります。そのときは、しなければよかったと思いました。

こんどからいやなことをされたときは、自分の気もちを話して、すすけみたいに、やさしくしようと思いました。いつも、お母さんに言われていることがあります。それは、

「自分がされていやなことは、人にしない。」

ということです。このことをずっとまもって生活していきたいです。

『小学校三年生の部』

《講　評》

三年生の発達段階に合う選書がされており、自分の生活に照らし合わせ意見や感動が率直に書かれていました。今後の工夫として、原稿用紙の使い方を正確に理解しておけると良いです。

【金　賞】

見方をかえると

桜ケ丘小学校　笠　煌大朗

「ヤカちゃんって、ぼくににてるなあ。」

本を読み始めると、すぐに思った。だってヤカちゃんの「ヤカ」は、やかましいのやか。毎日、うるさいと家でおこられているぼくにそっくりだ。

このお話は、ドドさんの家にこっそり住んでいるねずみの親子の話だ。ヤカちゃんは四人兄弟の四番目。声がものすごく大きくて、めいわくばかりかけている。住んでいる事がドドさんにばれないようにみんながんばっているのに、ヤカちゃんの大きな声でばれそうになってしまうからだ。ぼくも、その場の空気が読めずに大きな声を出して、めいわくをかけてしまうことがよくある。やっぱりヤカちゃんににている。

でも、いつもみんなにめいわくをかけているヤカちゃんが大活やくした事けんがあった。ぼくがとても気に入った場面だ。

ある日、ドドさんの家に、どろぼうが入って来

た。いろいろな物を取っていた。そしてさい後に、上とうなチーズを一切れ取って食べようとした。そのチーズは、ヤカちゃんがずっとねらっていたチーズだったから、ヤカちゃんは、いつもよりずっと大きな声で、「どろぼー！それぼくの食べるチーズだぞ！」と、さけんだ。そしたらどろぼうは、びっくりして、にげていった。ドドさんたちに、感しゃされたヤカちゃんは、「番ねずみ」として、どうどうとくらせるようになった。

いつもは、みんなにめいわくをかけているヤカちゃんの大声が、とってもみんなの役に立ったのだ。

このお話から学んだことがある。それは、人の悪いところやにがてな事も、見方をかえるだけで、すごくいい所になるということだ。

ぼくは、友だちができていない事や、やり方がちがう事が気になって、すぐにちゅう意をしてしまう。言われた友だちも、いやな気持ちになって、よくけんかになる。でも、その気になるところも、見方をかえれば、もしかしたらすごくいいところかもしれない。

ぼくにも悪いところやにがてな事がある。わすれっぽいところ、整理整とんができないところ、ほかにもたくさんある。父にもにがてなことはあるし、母にもある。妹にもあるし、もしかしたら先生にもあるかもしれない。だれにだってきっとあると思う。だから、見方を少しかえて、ゆるしたり、みとめたりするといいと思う。人の悪いところではなくて、いいところをたくさん見つけられる人になりたい。

【銀　賞】

みんな一しょ、だれでも主役

吾田小学校　後藤　彩綾

この本の題名は、「４年２組がやってきた」です。なぜ「４年２組に…」ではなく、「４年２組が…」なのか（ふしぎだな、何でだろう。）とわたしは思い、この本をえらびました。

このお話の主人公は、のうせいまひというびょうきで車いす生活をおくるマーくんという男の子です。マーくんは、話したり歩いたり、手を動かしたりできません。でも、おへんじスイッチで気持ちをつたえることができます。

読みすすめていくうちに、わたしはなぜ「４年２組がやってきた」という題名なのか分かりました。しょうがいのある人の本は今までたくさん読んできましたが、この本はまわりの人がしょうがいのある人にどうするかではなく、しょうがいのある人のし点で書かれたしょうがいのある人が主役の本でした。

一学き、わたしのクラスにも、とくべつしえん学校から二人の友だちが交りゅう学習に来ました。わたしは、げんかんまでむかえに行き、手をつないでかいだんを上ったり、トイレについて行ったりしました。音楽のじゅぎょうでは一しょに教科書を見たり、歌ったり木きんを鳴らしたりとても楽しかったです。マーくんは、４年２組との交りゅうの中で、くやしい、はずかしい、きんちょうする、もっといろいろしたいのにざんねん…いろいろな気持ちがあふれていました。二人の友

だちもそんなことを思っていたのかもしれないなあとわたしはドキッとしました。

交りゅう会のさい後で、マーくんは「あぁ、あぁーーっ！」とはじめて大きな声を出すことができました。おへんじスイッチを使わず、自分の声でみんなにありがとうの気持ちをつたえようとしたのだと思います。たんにんのよし田先生がなみだをうかべた場面では、わたしもむねがじいんとしてすごくうれしくなりました。

わたしには、体のしょうがいはありません。だから、マーくんや二人の友だちより、できることは少しだけ多いかもしれません。でも、わたしにも、のぼりぼうやキューブなどにがてなものがあります。にがてなものをあきらめずにがんばる、これはみんな同じだと思います。みんな同じ人間。しょうがいのある人は弱く、何でも手つだってあげないといけないという考えは間ちがいかもしれないなあとマーくんの言葉を読んで、わたしはむねがしめつけられました。そして、このことに気づかせてくれたマーくんにありがとうと思いました。

これからも、交りゅう学習やいろいろな場所でしょうがいのある人と出会うき会があると思います。でも、それはたまたましょうがいがあるだけで同じ友だちです。わたしは、だれにでもやさしくたくさん友だちをつくり、みんなで幸せになりたいです。

【銅　賞】

「友だちやもんな、ぼくら」を読んで

南郷小学校　守山　宗助

「すなおにあやまることの大事さ、仲間を大切にする事の意味について考えさせられました。」

この本は、仲よし三人組の男の子たちがラジオ体そうの帰り道にカブト虫を見つけうっかりカミナリじいさんというういつもおこっているおじいさんのお庭にむだんで入って木のぼりをしてしまい、どなられてしまいます。おどろいた三人の少年は走ってにげようとしましたが、一人の少年がころんでにげおくれてしまいます。しかし二人の少年は、そのままみすててにげてしまいました。ぼくは、とてもひどいなと思いました。でも実さいにそんなカミナリと言われるくらいこわいおじいさんにどなられたとしたらげんじつできるかなと考えてしまいました。こわいという気もちが仲間を守るという気もちを上回ってしまったということだろうけど、やっぱりぼくは、みすてるのはちょっとちがうなと思います。

そのあと少年たちは、ゆうきを出してカミナリじいさんにあやまりに行きます。仲間を助けるためです。ところがカミナリじいさんは、おこるどころかにっこりわらってほめてくれました。

「かってによその家の木にのぼって、ムシとりをするのはいかん。にげだしたのもけしからん。じゃがおまえたち、よくもどってきたな。」

「ええか、友だちは大切にせにゃいかんぞ。ほんとうに友だちというのは、ええもんじゃな。」

と言ってほめてくれたおじいさんはえらいなと思いました。そしてゆうきを出した少年たちはもっとえらいなと思いました。

この間ぼくは、お父さんが大切にしていた船のもけいで遊んでいたところマストというほを取りつける部分をおってしまいました。だまっておこうか、すなおにあやまろうかなやみましたが、だまっておくことにしました。お父さんのおこる顔がうかんだからです。

数日後けっきょく見つかってしまい、こっぴどくしかられてしまいました。その時のお父さんの顔は、まるでカミナリじいさんのようでした。お父さんは、やってしまったことは、しょうがない、しょうじきにあやまることができないことをとくにおこっていました。もしぼくが少年たちのようにあやまることができたならぎゃくにほめられたかもしれないと思うと、とてもそんした気分です。

つぎにこんなことがあった時にはしょうじきに、「ごめんなさい」と言えるようになりたいです。

そしてこの本にでてくるような仲間をたくさんふやしていきたいと思いました。

『小学校四年生の部』

《講　評》

登場人物の心情や作品の伝えたいことを四年生のレベルで的確にとらえ、生き生きと自分の意見・感想を述べることができました。選書については、さらに発達段階に合うものであるとよいです。

【金　賞】

「かあちゃん取扱説明書」を読んで

飯肥小学校　川越　葵生

みなさんは、お母さんを見ていて、「そんなにおこらんくてもいいじゃん。」と思ったことはありませんか。弟といっしょにお母さんからおこられたときに、「お母さんだってすぐにわすれることが多いじゃん。なっとくがいかないなぁ。」と思うことがあります。そんなとき、「ぶすーっ」としてしまって、よけいにおこられたりします。おこられると、いらっとするし、気分も悪くなります。お母さんもイライラするだろうし、おこることがなければ、気分もいいのかなぁといつも考えてしまいます。そんなことを思っていたら、本屋でこの本が目にとびこんできました。なので、読んでみることにしました。

この本の内ようは、宿題も時間わりもやりたいことの後にする主人公のてつやさんが、お母さんの扱い方をマスターして、おこずかいも、おやつも、ゲームも、ごはんも、宿題も、時間わりも、

全て自分の思いどうりにしようとしたお話です。

一番心にのこったことは、宿題や時間わりをとてもいやがっていたてつやくんが、自分の生活をコントロールできるようになった場面です。私は、とても勉強や時間わりをいやがっていたてつやくんが、急にきちんと勉強や時間わりをやるようになったのがふしぎに思えました。なぜそう思ったのかというと、お母さんを上手くコントロールしようとして、自分の意見を全て通そうとしていたのに、けっきょくお母さんではなく、自分をコントロールしていたからです。私は、どうしてもてつやくんが自分をコントロールしたのかを考えてみました。てつやくんは、お母さんをコントロールするために、はやく宿題をやることや、表をつくってやったことにまるをつけるなど、良いことも考えて行っていたからかなぁと思いました。私も、てつやくんみたいに良い方法を考えてお母さんをおこらせないようにしたいです。

私は、この本を読んで、「お父さん取扱説明書」をつくってみたいと思いました。お父さんがどうやったら、けんこうに気をつかうか調べたり、おこられない方法を調べたりしてみたいです。そして、お父さんやお母さんをおこらせないようにしたいです。

この本は、お父さん、お母さん、家族などにイライラしている人、おこらせたくない人、読みやすい本が読みたい人、「取扱説明書」を作ってみたい人にオススメです。ぜひ、読んでみてください。

【銀　賞】

「わたしの妹は耳がきこえません」を読んで

吾田小学校　田中　碧彩

この本を選んだ理由は、耳が聞こえないとはどんなことなのか知りたかったからです。そして、人の体のことについてもきょう味がありました。この本は、耳の聞こえない妹のことを大切に思ってお姉さんが書いた本です。

本を読んで心に残った場面は、お母さんとお姉さんが耳の聞こえない妹に「いう」練習をしていたところです。ボール、犬、本などの言い方を楽しそうに練習していました。妹が少しずつ物の名前を言えるようになったことを私はうれしく感じました。そして、その声を聞いてみたくもなりました。しかし、くり返し練習を重ねても、なかなか完ぺきな発音ができない人の大変さが分かりました。毎日、毎日練習するすがた、時には笑顔でがんばるすがたにあきらめない心の強さを学びました。

耳が聞こえないということは、うまく言えません。うまくしゃべれません。だから、人に気持ちを分かってもらえないこともあります。そんな時に耳の聞こえる私たちが、やさしくよりそって、相手の気持ちを考えたり、どうすれば相手も伝えやすいか方法を学ぶことが大切だと思いました。例えば、書いて会話する、手話で会話するなど、いろんな方法があります。その方法を私たちも学んでいく必要があると思います。

もしも、私の弟や妹が同じように、体のどこかが不自由だったら、正直悲しいです。それでもやっぱり大切な家族なので、この作者のように、いっしょうけんめいそばでささえると思います。そして、弟、妹にしょうがいがあるからと、すぐにあきらめないでいろんなことにちょうせんしてほしい、自分に自しんをもって生きてほしいとねがうはずです。きっとこの作者もそうねがいながら、妹のことを大切に見守っていたと思います。

そもそも、私たち人間は一人ひとりちがいます。顔もせいかくも考え方も。それでも、そのちがいをみとめあって毎日楽しくすごしています。だから、しょうがいがあるかないかもそのちがいの中の一つにすぎません。そのことにたくさんの人が気付いて、みとめ合って、思い合っての世の中の人全員が悲しい思いをすることがないような社会になったらいいなと思います。

この本を通して、耳が聞こえないという大変さに気付くことができました。これからは、相手の立場に気付いて、知って、やさしい方法を学んで、思い合う、そんなすてきな人に私はなりたいです。

【銅　賞】

「約束の木」を読んで

榎原小学校　星野　楓花

わたしは、「約束の木」という本を読みました。その本をえらんだきっかけは、表紙の絵にたぬきが二ひきと、「保存樹」と書いた木とベンチがあっ

て、わたしはその本にきょうみをもって、おもしろそうでした。最初に題名を見たときは、「約束の木」と書いてあり、約束した木があるのかなと思いました。

この本の主人公は、ポンタとポン子です。二ひきは、とても仲良しなたぬきの子どもです。二ひきは、「保存樹」と書いてあるとても大きな、たくさんのどんぐりを落とす太いコナラの木で、毎日会っていました。でも、ポンタがずっとまっていてもポン子はこないという話で、ポンタがベンチで毎日いろいろ思い出したり、考えたりします。さい後には子どもたちが関係します。

わたしが一番心に残った場面は、ポンタがコナラの木とわかれをするところです。ポンタは、いつもどおりに約束の木の場所に行くと、人間が「保存樹」と書いてあるふだをはずして、約束の木を切っていました。ポンタはそれを見て、ずっと残す、と人間が「約束」したはずなのにと言っていました。そのあとには、こう書いてありました。「ポンタがそっとふれると、コナラのみきはまだ息をしているようでした。ポンタは、大きなコナラとすごしたたくさんの日々を静かに思い浮かべました。コナラの葉は春に暖かい風を運んでくれました。夏には、大きな葉が木かげをつくり、かんかんにてる太陽をさえぎってくれました。秋には、何万というどんぐりを落としてくれました。冬には、茶色の落ち葉をたくさん落として、歩くたびにカサカサと鳴って楽しくておどってしまいました。」と書いてあり、わたしは、人間は何がなんでも自由すぎる。もっと思いやりをもつ心

じゃないといけない。と、思って、もっと自然を大切にしないといけないなと思いました。

この本を書いた菊池和美さんは、森や自然を大切にしてほしいというねがいがあると思います。わたしは、森や自然を大切にして、思いやりのある心をもって、やさしい人になりたいです。

ポンタのお父さんがだれにでも一つはとくぎがあると言っていて、ポンタが人間はどうなの？とたずねていました。わたしはその場面を読んでたしかにと思いました。ポンタのお父さんは、人間には知恵があるけれどそれが一番のとくぎではないと言っていて、人間の一番のとくぎってなんだろうと思いました。

ポンタは、ずっとポン子のことを待っていたと思います。森の動物たちは、くろうして生きているんだなと思いました。思いやりのある心を持って、森や自然、生きもの、そして、人間を大切にしていきたいです。おたがい助けあって、幸せな世界をつくりたいです。

『小学校五年生の部』

《講　評》

今年度多かったのは、動物・障害・病気などをテーマに書かれた感想文が多かったです。初めて知ってびっくりした、悲しかった、そしてこれからはこうやって生活していこうというような、自分の生き方と結びつけて感想を書いており、とても上手な作品ばかりで感心しました。

【金　賞】

「わすれたって、いいんだよ」を読んで

飯肥小学校　山之口　万結

わたしは、上条さなえさんの「わすれたって、いいんだよ」という本を選びました。なぜこの本を選んだのかというと、「わすれてもいい」ということはどういう意味かふしぎに思ったからです。

沖縄料理店をやっているおばあちゃんは、いつも笑顔でなんでも作ってくれます。お客さんのなやみを聞いたり、孫のるりが落ちこんでいるとき、「なんくるないさー。」と言って、はげましてくれたりします。そんなやさしいおばあちゃんですが、たん生日とムーチーを作ることだけは、教えてくれませんでした。それは、戦争中おばあちゃんのお母さんが、アメリカ兵にうたれて亡くなってしまったからでした。そのおばあちゃんが、・・・・・ニンチショウになってしまいます。

わたしが感動したのは、認知症で忘れてしまっ

たおばあちゃんのたん生日を、るりがムーチーを作ってお祝いした場面です。おばあちゃん本人が忘れてしまっても、家族や周りの人が覚えていればいいのだというところが、心にひびきました。

わたしの祖父も認知症だそうです。わたしがこの本を読み終わった後、母からそのことを聞きました。聞いたとき、声が出せず、だまりこんでしまいました。かわりになみだがぽろぽろと出てきました。大好きな祖父がわたしを忘れてしまうのではないかと思うと、またなみだが出てきました。祖父は、どんなときもわたしにやさしくしてくれます。わたしが会いにくるのを楽しみに待っています。一日に何回もわたしの名前を呼んで心配してくれたり、ほめてくれたりするそうです。会ったときは、いつもにこにこして遊んでくれるので、わたしは気がつきませんでした。

しばらくして、落ち着いてから、この本の意味を考えました。るりのおばあちゃんは、認知症で戦争の悲しい思い出を忘れられたから、初めてたん生日を祝えたり、ムーチーを食べられたりしました。認知症は、悪いことばかりではなく、悲しい思い出やつらい思い出を忘れることもできるのです。もしかしたら祖父にもそんな思い出があって、それらが忘れられるのかもしれません。そう思うと、少し元気が出てきました。これから祖父は、いろいろなことを、例えばわたしのことも忘れてしまうのかもしれません。それは悲しいことだけど、祖父は祖父のままです。わたしは、祖父が大好きです。祖父もわたしのことが大好きです。わたしが、そのことを覚えています。

「なんくるないさー」とは、どんなに悲しいことやつらいことも、どうにかなるという意味の方言です。すてきな呪文のように、わたしの心にこだましました。わたしも、「なんくるないさー」の精神でつらいことがあっても明るく前向きに生きたいと思います。

【銀　賞】

「青空のむこう」を読んで

吾田小学校　酒井　りあ

私は、「青空のむこう」という物語を読みました。この本は、死ぬことと、生きることとはどういうことか改めて考えさせられる本です。交通事故で突然亡くなってしまった少年ハリーのお話です。物語は、ハリーが亡くなった後の世界から始まります。突然亡くなったハリーは死後の世界で親友となったアーサーと一緒に現実の世界へおりたちました。学校や自宅をたずねますが悲しみにくれる家族を目にし、家族を元気付けようとしますが、ハリーの声はまったくとどきません。ハリーは姉とケンカをしたまま亡くなったのであやまりたかったのだろうと思います。

私も、お兄ちゃんと小さなことでケンカをすることがありますが、あやまることへの大切さを教えられた気持ちです。楽しい事はいつまでも続いてほしいけれど、悲しい事はすぐにでも忘れてしまいたいと思ってしまいます。だからこそ「明日」ではなく今やることの大切さを学びました。

あたりまえのように日々過ごしていけるのも家族が健康でいるからだと思います。

ハリーのように、人はいつ死をむかえるのかだれにも分からないことです。この本のように「死後の世界」があるのならば心残りはきっとあると思うので命を大切に生きていかなければならないと思いました。

私は、この本を読んでたくさんのことを学びました。悲しい気持ちになって、もう読みたくないと思ったりしたけれど、改めて考える時間がもてたので良かったです。

ハリーには仲の悪かったジュリーという友達がいました。その友達が書いた作文に仲直りがしたいと書いてありました。おたがいにきらいだと思っていた事が亡くなってから分かりとてもこうかいしていた事が残念です。私も同じような事があったら何でも言いあえる友達を大切にしていきたいです。

そしてハリーは思い残す事なく「彼方の青い世界」へと旅立って行きました。そこは青く海のような場所でした。そこへハリーは飛びこみ天国へ旅だって行ったのです。

死はとても怖い事ですがだれもが必ず経験することです。絶対にこうかいしたくないという気持ちはみんな同じだと思います。だからこそこれからも一日一日を大切に一生懸命に生きていきたいです。そしていつまでも笑って暮らしていけるように大きな目標を持ち失敗をおそれずなんでもちょう戦していきたいです。これから先、私にとってうれしいことや悲しいこと、なやんでも解決で

きないことが待っていると思うけれど、そんな時こそ「生きているだけで幸せ」と思える生き方をしたいなぁと思いました。この本を通してたくさんの事を教えてくれたハリーに「ありがとう」が言いたいです。

【銅　賞】

「かみさまにあいたい」を読んで

吾田東小学校　上村　萌々香

わたしは、当原珠樹さんの「かみさまにあいたい」という本を選びました。なぜこの本を選んだかというと、本を探していると「かみさまにあいたい」というせびょうしが見えてどういうことかがきになったからです。

主人公の雄一は、大好きなおばあちゃんにうそをついたまま永遠の別れをむかえてしまいいろいろなことがあり同級生の竜也といっしょに「神さま」との交信を試みることになったが二人とも心に傷をかかえていてそれで二人で力を合わせて神さまと交信をしようとするが、そこに人がきてちゅうとはんぱになってしまい先生がそれをいっしょにてつだってくれる話です。

わたしは、雄一のおばあちゃんがなくなってしまいどんなに雄一がかなしかっただろうなと思いました。

わたしにも似た経験があります。それは、ひいおばあちゃんがなくなりそのとき私は二年生であまり覚えてないけれどもっとひいおばあちゃんと

しゃべったりすればよかったとおもいました。ひいおばあちゃんは福岡であまり会えなかったので福岡に帰るときしか会えなかったのでこうかいをしました。このこうかいをいかしておばあちゃんやおじいちゃんなどみぢかな人などを大切にしようと思いました。

主人公の雄一はその経験をいかしこうかいをしないように前向きにいきていたので私も前向きにいきようと思いました。この本を読んでつらいことがあっても前向きにいきていこうと思いました。そのためにみんなを大切にしようと思いました。とってもかなしいお話だったけど最後はとってもハッピーエンドだったのでよかったです。

私は、この本を読んで学んだことが五つあります。

一つ目は、どんなにかなしくても前向きに生きるということです。二つ目は、うしろむきに生きると何もいいことなんて一つもないということです。三つ目は、今いきているということを日々じっかんしてその一つしかない命を大切にして生きていくことです。四つ目は、周りの人を大切にしてこうかいのないように生きていくことです。さいごに五つ目は、どんなこんなんがあってものりこえその経験をいかし周りの人にもやさしくこうかいのないように今しかない日々をじっかんしていきていくことです。

私はこの本をよんでとても考えがかわりましてこのことをいかしていきたいです。

『小学校六年生の部』

《講　評》

どの作品も、読書を通して学んだり、感じたりしたことを自分の生活と関わりをもたせて書かれていました。自分が今後どう成長していくのか、作品と真摯に向き合う姿がうかがえます。

【金　賞】

自分の時間の使い方

吾田東小学校　後藤　美羽

「時間のムダでしょ。早くしなさい。」

私が勉強中にボンヤリしていると、必ず母から注意をされます。「わかってるけど、言わなくていいのに。」といつも思ってしまいます。

そんな時、この「モモ」を読みました。主人公の「モモ」は町はずれの円形劇場あとに住みついた不思議な少女です。「相手の話を聞く力」という才能があって、モモはみんなの人気者です。モモには「道路掃除夫ベッポ」と「観光ガイドのジジ」という親友がいます。周りの人からは、マイペースすぎる老人といい加減な若者だと思われています。二人とも仕事のやり方にムダがとても多いですが、自分の仕事が大好きで自分なりに工夫しながら楽しく働いています。

ある日、この町に「灰色の男たち」があらわれます。「ムダな時間を節約すれば貯金をできますよ。」とうそをついて、人々の時間をぬすむ「時間どろぼう」です。人々はムダな時間を節約して必

死に働き、お金も物も前より増えたのに、いつもふきげんでおこりっぽく心のゆとりのない人に変わってしまいます。

私は不思議だなと思いました。私は母からいつも言われている通り「ムダな時間がない方がゆとりができる」と思っていました。でも、時間を節約している人より、ムダな時間が多いベッポやジジの方がとても心にゆとりがあって、幸せそうに見えたからです。

ついには、ベッポやジジまで時間をぬすまれて、モモは一人ぼっちになってしまいます。モモはみんなの時間を取りもどすために、時間の番人マイスターホラのところに行きます。その時、ホラはモモにこんなことを言います。「人間はそれぞれ自分の時間をもっている。そしてこの時間は本当に自分のものである間だけ、生きた時間でいられるのだよ。」「自分の時間をどうするかは、自分自身で決めなくてはならない。」私はこの言葉をみて、あっと思いました。ベッポやジジの方が幸せそうに見えたのは、ただ働くだけじゃなく、自分なりに工夫したりして、時間をどう使うかを自分自身で決めていたからじゃないかと思ったからです。ベッポもジジもマイスターホラが言っていた生きた時間を過ごしていたんだと思いました。

私はこの本を読んで、ムダな時間もあってもいいなと思いました。たとえ周りの人から見てムダな時間でも、自分にとって心のゆとりにつながる時間になるなら、それは生きた時間になると思ったからです。生きた時間が多いほど、ベッポやジジみたいに幸せになれると思います。そのために

大切なことは、自分の時間をどう使うのかを自分自身でしっかり考えて決めることだと思いました。

だから私も自分の時間の使い方を考えてみました。勉強中にボンヤリすることは生きた時間にはならないと思ったので、今度からは気を付けてやめるようにしようと思いました。

【銀　賞】

子供になった祖母と私

東郷小学校　重倉　あい

私の祖母は、今年八十才になりました。四年前くらいから、老人ホームに入っています。

「奮闘するたすく」は、主人公・佑の祖父が老人ホームへ行くのを嫌がり、それを何とか行くように後押しする佑達の奮闘のお話です。佑の祖父と私の祖母、そして佑と私の家族を重ねてしまい、私はどんどん物語に引き込まれていきました。

佑の祖父は七十五才です。元刑事で、同じ年代のお年寄りと比べて、元気でしっかりしていました。しかし、最近様子がおかしいということから、お話が始まります。

私の祖母は、毎日のようにお友達とカラオケに行くほど、とても活発な元気な人でした。祖父が亡くなって一年ぐらいで、老人ホームに入り、そこでの生活を楽しんでいました。ところが、一、二年前から、同じことを何度も聞いたり、ずいぶ

ん前の話をしたり、少し変だなと思っていました。

この前、久しぶりに会いに行ったけど、私がだれか分かっていませんでした。母が、「あいですよ。」と言ってくれたので、やっと分かってくれました。

祖母は病気のせいであまり視力がありません。そのためなのかと最初は思っていました。でも、まちがっていました。自分が産んだ子供の人数を一人多く答えたり、名前も忘れたりしていて息子である父に言うと、ショックだろうなと思うと、私まで悲しくなりました。

一番おどろいたのは、「うちの人はどこ。」と佑の祖父と同じ事を言ってきたことです。佑の祖母も、私の祖父も、亡くなっています。

なぜ、そんなことを言うんだろうと思いました。私は、そんなことも忘れた祖母が、とてもじゃないけど信じられませんでした。いつか、父や母もこうなるのかと思うと、こわくてしかたがありません。

でも、この本の中で「二度わらし」という言葉を知りました。人が年を重ねて、もう一度子供みたいになるという意味です。とても良い言葉で、心がじんとしました。佑の祖父や私の祖母に、良い意味でぴったりだと思いました。私は、子供になるなら、しかたがないとも思いました。

私は、佑の祖父と私の祖母を重ねたことで祖母のことが少し理解出来るようになりました。認知症のことや、かい護する人の気持ち、かい護される人の気持ちを知りました。また、祖母がお世話

になっている老人ホームのかい護士さんの優しさや、大変さも気づきました。

夏休みの終わりに、祖母が一日家に帰ってきます。私は、祖母とたくさんお話して、祖母が忘れてしまったことは教えてあげたいと思います。そして、出来なくなったことを家族と一緒にたくさん手助けして、楽しい一日を過ごしたいです。

【銅　賞】

受け継いでいくもの

吾田小学校　大久保　凛

私の一番好きな食べ物は、おばあちゃんがにぎってくれたおにぎりです。

おばあちゃんのおにぎりはシンプルだけど、なぜかまた、食べたくなる不思議なおにぎりです。

このタイトル「おばあちゃんのおにぎり」を見たときに、大好きなおばあちゃんの顔が浮かび、思わず手にとってみました。

この物語は、主人公「ぼく」の誕生日祝いでの事件の話です。

期待をしていた誕生日祝いのおばあちゃんからのプレゼントが、おにぎりだったことに腹を立てて、ぼくは一口も食べませんでした。私も同じように、誕生日という特別な日に、プレゼントがおにぎりだったら、いくら大好物だといっても同じような態度をとったと思います。その後、ぼくは誕生日会に来てくれた友達と遊んでいたのですが、ちっとも楽しめませんでした。おばあちゃん

とおにぎりのことが気になって、しょうがなかったのです。途中で切り上げて家に帰ると、おばあちゃんがおにぎりをくずして、お茶漬けにして食べていました。ぼくは、とても後悔して悲しい気持ちになりました。

私もぼくと同じように後悔していることがあります。小さい時にお人形の洋服をおねだりしたらおばあちゃんが作ってくれたのですが、買ってもらえると思っていた私は、気に入らず、ふてくされてしまいました。その時、一しゅん見せた悲しげなおばあちゃんの表情が、今でも忘れられません。でも、おばあちゃんは、何もなかったかのように、その日も今も、私に優しく接してくれます。この本の中のおばあちゃんも同様です。

私がおばあちゃんの立場だったら、ぼくや私にこんな温かく接することができるのでしょうか。無理だと思います。なぜ、この二人のおばあちゃんはこんなに、心が広く人に優しく接することが出来るのだろうかと疑問に思いました。もちろん優しい性格なのでしょうが、それだけではないと思います。

私のおばあちゃんは、私に色々な話をしてくれます。けん玉、あみもの、お手玉などの遊び方やコツ。野菜の知識。見知らぬ人をスリから守った話など、それは盛りだくさんです。ぼくのおばあちゃんも私のおばあちゃんも、私が生まれる前から何十年もの長い年月を力一杯生き、仕事もたくさんし、子育てもし、色々な物を見て経験してきたのだと思います。

母は私に、いつも二つのことを言います。一つ

は、「毎日一生懸命生きなさい。」もう一つは、「感謝の気持ちを忘れてはいけません。」です。これは母が子どもの時からおばあちゃんに言われてきた言葉です。でも私はこの言葉をよく忘れてしまいます。おばあちゃんから母、母から私へ受け継がれているこの教えをもっと大切にしたいと思います。そしていつか私も海のように広く優しいおばあちゃんみたいな人になりたいです。

『中学校の部』

《講　評》

金賞の重永さんは、余計なことを述べず、内容に迫ることを書くことができていた。銀賞の外山さんは、自らの体験と比べながら感じたことを素直に書いていた。銅賞の松浦さんは、自分の命や生き方を見つめなおすに至った様子が分かりやすく書けていた。入選、盛田さんは、自分の優しい気持ちを素直に書けていた。

【金　賞】

「一〇五度」の生き方

榎原中学校　三年生　重永　知夏

私は、「十年後はどんな仕事をして生きているのかな。」と考えた。

今はまだはっきりとした職業の目標は決まっていない。でも私は絵を描いたり、小物をつくるのが好きだ。また、自分がつくった物で喜んでくれる人が多いのだが、その人の笑顔を見るのも好きだ。

だから、「ものづくり」に関する職業に就きたいなと考えている。

「一〇五度」の主人公、大木戸真は転校先の学校で出会った、スラックスをはいている女子の早川

梨々と、共通の趣味である、「イス」の話で意気投合し、二人はすぐに仲良くなる。そして、真がデザイナー、梨々がモデラー（製作者）として「全国学生チェアデザインコンペ」に出品する作品を作ることにする。

しかし、真の心にモデラーよりデザイナーの方が立場が上という意識があったせいで、梨々とケンカになってしまい、イスのデザインも中々進まなくなってしまう。

そんな時、真と梨々のケンカの仲裁をしたのは、伝説のモデラーと言われる真のじいちゃんだった。

じいちゃんの言葉を理解した真は梨々と仲直りし、梨々の家でプロの姿を間近に見て、改めてイスのデザインを考えていった。

しかし、そんな時に真がデザインの道へ進むことに反対している父にプロジェクトのことがばれてしまい口論になる。そして、クリエイターの道で苦労しているという父の友人二人の話を聞くことになる。二人からデザインの仕事のつらさや大変さを聞き現実を知る。一方で、それでも楽しくてやめられないという話も聞くことができ、真は人生を考える良い時間を過ごした。

いろいろな人のアドバイスを借りて完成したイスは最終的に審査員特別賞を受賞した。

真は父の反対がありながらも、大学で建築を学ぶことを決めたのだった。

私は真のお父さんが芸術で生きることに反対する気持ちも分かった。芸術の世界で苦しんでいる友人を見ているし、収入も不安定で大きな重圧に

さらされてしまうからだと思う。

しかし目指さないと好きなことをして生きていくことはできないと思う。私も、絵の仕事をしたいと思っても、いざインターネットなどで実力が上で、苦労しながら絵を描いている人を見ると不安になる。だが、生まれた時から完璧な人はいないと思う。実力がないのならその分、努力して頑張ればいいのかなと思った。

真はイス作りのプロジェクトを通して人と関わっていく喜びを知る。サラリーマンだろうが、プロだろうが、仕事は一人では成り立たないということを真は実感したのだ。

真のじいちゃんは、真と梨々がケンカしていた時、こう語った。

「職人を怒らせるようなデザイナーに、ろくなやつはいねえんだ。仕事はフィフティフィフティだ。どっちが上も下もねぇぞ。」

さらにじいちゃんは重ねて、

「一〇五度はイスに軽く寄りかかるのに丁度いい。人間関係も一〇五度くらいが丁度いい。九〇度で直立しても、ソファや寝椅子みたいに寄りかかるのもよくねぇ。お互いにちょっと寄りかかってこそ、人間関係はうまくいく。人間なんて、だれだってだれかに寄りかかって生きてんだよ。」と言っていた。

この言葉を読んだ時、私を支えてくれるたくさんの人がうかんだ。家族や友達、先生などだ。今までたくさん寄りかかって助けてもらった。でも、逆に私はだれかを受けとめることができているだろうかとも考えた。自分のことで精一杯なこ

とも多かったように思う。

だから私は、じいちゃんの言葉のように、一〇五度の人間関係を築けるようにしたいと思った。お互いが少しずつ寄りかかっていけるようにしたい。そして、目標へ向かって努力をしようと思えた。

私はこの作品を読んで自分の将来についてや生き方について、改めてじっくり考えることができた。

自分の目標ともう一度しっかり向き合ってこれから「どんな人生を送っていくか」を考えて、決めていきたいと思う。

【銀　賞】

夢に向かって

東郷中学校　三年　外山　桜

私は、声優の梶裕貴さんが書かれた、「いつかすべてが君の力になる」を読みました。私がこの本を読んだ理由は、以前から梶さんに憧れていて、さらにこの本は十四歳に向けて書かれた話だと知ったからです。

この本は、梶さんが声優という夢を持ち始めて今に至るまでについて書かれています。さらに、十四歳に向けた言葉もあります。この本を読んで、とても梶さんらしいなと思いました。ネガティブで真面目でいつも人のことを気にしている性格が、文章からにじみ出ているようでした。この

本の中で一番印象に残っている言葉は、「本当につらいことからは、目を背けて全力で逃げる」というものです。私は中学一年生の頃、陸上部に入っていました。しかし、私は走ることに限らず、運動すること自体が大嫌いです。そんな私が、陸上部に入部した理由は、一つ年上で小学生の頃仲良しだった女の子に誘われたからでした。今思えば、小学生の時に交わした約束で、彼女がそれを覚えていない可能性だってあったのに、私はそれを信じて迷わず入部しました。

ところが、入部した時、目の前にいた彼女は、私の記憶にある優しくて、可愛らしい彼女ではありませんでした。さらに、練習メニューは私が思っていた以上に何倍もきつかったのです。一人だけズバ抜けて足が遅くて、おまけにコミュニケーション能力も低い私は、部活に参加するのが、かなり苦痛になってきました。そんな状況に限界を感じたのは、中学一年生の九月でした。運動会の練習をした授業が終わった後に、顧問の先生に泣きながら「やめたい。」と言った時のことは、今でも鮮明に覚えています。そこから、私が部活を辞められるまでは、数か月かかりました。

先生や親には、強く反対されました。私自身も何回も考え直したりしました。しかし、結局は退部しました。その事を後悔しているわけではないし、別に先生方に私の気持ちを理解してほしいと思ってもいません。でも、心の片隅では、あの選択が正しかったのか、と思っていたのかもしれません。だから、この本の中に、「辛いことからは逃げていいのだ」という言葉を見つけて、思わず、

涙がこぼれました。あの時、選択したことやこれまでの人生は間違えていなかったのだと言ってもらえたような気がして、とても救われました。そして共感した言葉もありました。それは、「何より怒られたくないし、嫌われたくない」というものです。私は、梶さんと同じく生徒会役員です。しかし、立候補した理由は、梶さんとは違い、単に周りの人から褒められたいという気持ちがあって、生徒会役員になれば、やることが増えて、その分褒められると思ったからでした。こんな感じで、私は何をすれば、怒られないかと考えながら行動しているので、そのせいで自分の意見を言えないこともあります。私はこんな自分の性格が嫌いだったけれど、梶さんもそういう風に考えているのだと思うと、少しだけ嫌いではなくなりました。本の中には、他にも「こんなこと意味が無いと思わず、何事も全力で取り組む。」という言葉を聞いて、私は全力で何かに取り組んだことがあるだろうか、と考えました。私は、無駄に現実主義だったり、いちいち物事に意味を求めたりしてしまうので、全力で取り組んで、楽しんだり泣いたりできるようになりたいなと思いました。そして、今の私には、明確な夢はありませんが、海外に住んで、海外で働きたいという漠然とした夢はあります。梶さんが、「夢を持っている人の世界は広い。そしてみんな輝いている。」と本の中で言われていて、私はいつどんな時も夢だけは持って生きていこうと思いました。私の人生は私のものです。だれがどんなことを言っても自分の意見が最優先だという気持ちを強く持ち、しっかり貫いて

いきたいです。未来の自分が困らないように行動することも大事ではあるけれども、未来の自分のために現在の自分が苦しくて、泣いていたらだめだと思います。未来で何が起こるか分からない。嫌なことを我慢しても、未来で良いことがあるとは限りません。この本を読んで、本当に良かったと思います。勇気づけられたり、共感したりして、涙が止まりませんでした。私も梶さんに負けないように生きていきたいです。

【銅　賞】

毎日を大切に過ごすために

吾田中学校　三年　松浦　結奈

「私、生きるから。みんなの分も、しっかりと生きるから。」

主人公「蛍」のこの言葉から私は、生きることについて改めて深く考えることができた。

私がこの本を選んだ理由は、書店で見かけ、あらすじから興味を持ったからだ。この本は、修学旅行中の交通事故で命を落としてしまった蛍が、この世に残した三つの未練を解決していく話だ。しかし本当は、亡くなっていたのは蛍ではなく、蛍が未練解消した三人、同級生の蓮と栞、そして蛍の祖母の方だった。

私と蛍は似ている点があった。私も蛍も、自分の素直な意見を伝えられない点だ。時々自分の意見が言えないことがある。相手に合わせて話してしまうことがある。まるで、本の中の自分を見ているような気持ちになった。しかし蛍は、地縛霊の孝夫や恭子、蛍と同じく未練を解消中の涼太と出会うことで、少しずつ気持ちが変化していく。孝夫の娘を見守る切ない思いや、恭子の「生きてさえいれば」という後悔を知ることで、未練を解消する勇気をもらう。その中でも、もっとも私の心に残っている場面は、蛍が涼太の未練解消の手伝いをする場面だ。涼太はまだ幼い子供だったが、トラックにはねられ、命を落としてしまった子だ。そんな涼太の未練の相手は、生まれたばかりのウサギだった。涼太はウサギの赤ちゃんが生まれたことを心から喜んでいた。自分の死の瞬間に、新しい命の誕生を願っていたのだ。もしも私が涼太の立場だったら、新しい命の誕生でも素直に喜べないと思う。それどころか、自分の死を悔やんでいるだけで、ウサギのことさえ忘れてしまう気がする。この場面の、涼太の純粋で優しい気持ちに、心が温かくなった。そして私も、このような気持ちを持って日々過ごしたいと思った。

蛍が未練解消をしていく中で、未練解消をしても悲しくなるだけだという場面があった。未練解消でできることは、ほんの少しの間だけ相手と話せるだけだ。未練解消はあくまで未練解消で、生き返れるわけではない。死んでから後悔しても何もできない。だからといって、死を避けることはできない。そんな私たちにできることは、一日一

日を大切に生きて、自分の気持ちを素直に表す。ただそれしかないと思う。どんな時もこのことを忘れてはいけないと思う。

最後の場面で蛍は、自分ではなく、三人が亡くなったことを知る。蛍は優しいから、三人と一緒に自分も行くと言い出す。私もそう言うと思う。自分一人だけ生きるなんて自分も悲しいし、相手も生きたいはずだから悔しいと思う。人が亡くなったときも、悲しすぎて泣いてばかりでいると思う。けれどこの本を最後まで読むと気持ちが変わった。自分はせっかく生きていくチャンスをもらったのだから、生きたくても生きられなかった人の分まで精一杯生きなければならないと思った。そしていつまでも立ち止まっていないで、前に進むことが大切だと思った。生きることの重大さを深く考えることができた。

私はいつも、一日一日を精一杯生きていない気がする。でもそれは、他の人にも言えるのではないだろうか。毎日毎日、一分一秒を一生懸命生きていたらすぐに疲れてしまう。だから時には、ゆっくり息抜きをすることだって必要だと思う。でもそんなときでも適当に過ごさず、生きたくても生きられなかった人のことを想っていたい。どんな過ごし方であっても、一日一日を大切に生きていきたい、そう思う。

近年、地震や豪雨などの災害により、命を落としてしまう人が沢山いる。会ったこともない、全く知らない人々だが、やはりそのようなニュースを聞くと心が痛む。亡くなった人々は皆、もっと生きたかったはずだ。自分の周りの人だけではな

く、生きたかった沢山の人々がいるということを、心に留めておきたい。

この本から私は、「生きる」ということについて深く考えることができた。生きることはすごいことなんだと、改めて感じた。もっと生きたかった人は大勢いた。だからその人たちの想いを胸に私も生きていきたい。これからの日々をそんな気持ちを持って過ごせば、自然と一日一日を大切に生きていくことになるのではないだろうか。

今、私には、「誰か」のために生きるという場合の「誰か」が具体的に存在するわけではない。しかし、これから生きていく上でかけがえのない誰かとの出会いがあるはずだ。出会いを楽しみにして生きていきたい。

読書感想文入選作品名一覧

【小学校一年生】

いとしのいぬハチ　白坂　桜菜（吾田東小学校）

あきらめない　佐藤　陽菜子（吾田小学校）

【小学校二年生】

としょかんライオン　渡野　真弥（吾田小学校）

【小学校三年生】

人に育てられたシロクマ・ピース　森　柚奈（大堂津小学校）

【小学校四年生】

かあさんのしっぽっぽ　黒木　蘭夏（吾田東小学校）

【小学校五年生】

ナイチンゲール　兵頭　心結（吾田東小学校）

君たちはどう生きるか　徳村　夢生（吾田小学校）

【小学校六年生】

ルイ・ブライユ　白岩　愛莉（大堂津小学校）

光とともに・・・　新名　未優（潟上小学校）

【中学校】

かならずお返事書くからね　盛田　侑愛（飫肥中学校二年）・・・・10

読書感想画入賞作品

『小学校一年生の部』

金賞

どうぞのいす

濵田　怜那（飫肥小学校）

銀賞

ねこのぼんおどり

柿本　絢志（潟上小学校）

銅賞

サイモンは、ねこである

水元　凌駕（榎原小学校）

『小学校二年生の部』

金賞

ミウの花まる夏休み

川添　佑珠（飯肥小学校）

銀賞　一日だけうさぎ

佐原　苺果（飯肥小学校）

銅賞　ゴマとキナコのおいもほり

米津　あおい（飯肥小学校）

『小学校三年生の部』

金賞
ピンクのドラゴンをさがしています
鬼束　凛音（飫肥小学校）

銀賞
りすのきょうだいとふしぎなたね
外山　夏羽（飫肥小学校）

銅賞
恐竜大図鑑
谷口　琥太郎（吾田東小学校）

『小学校四年生の部』

金賞
ポリーとはらぺこオオカミ
藤井　帆奈海（飯肥小学校）

銀賞
三年一組　春野先生！
川越　葵生（飯肥小学校）

銅賞　でんでん虫の悲しみ
野辺　菜月
（吾田小学校）

『小学校五年生の部』

金賞
窓ぎわのトットちゃん
濵田　知希（飫肥小学校）

銀賞
蜘蛛の糸
肥田　健吾
（油津小学校）

銅賞
ストライプ
外山　誌菜
（油津小学校）

『小学校六年生の部』

金賞

わたしの苦手なあの子

後藤　美羽（吾田東小学校）

銀賞

鎌倉物語

郡司　鈴実

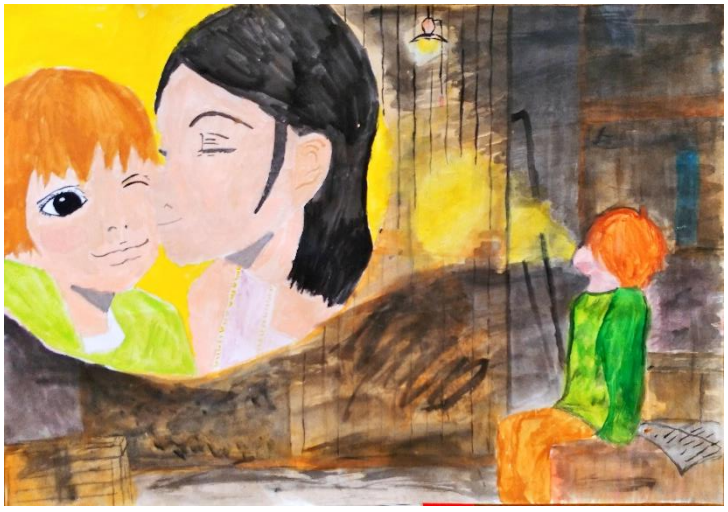
（飯肥小学校）

銅賞

I†(それ)と呼ばれた子

田端　乙寧

（吾田東小学校）



読書感想画入選作品名一覧

【小学校一年生】

一日だけのうさぎ　山口　寛輔（飫肥小学校）
ねこのぼんおどり　新名　李心（潟上小学校）

【小学校二年生】

なんにでもレナール　徳尾　優亜（南郷小学校）
学校の七つのかいだん　田中　りこ（油津小学校）

【小学校三年生】

だいぶつさまのうんどう会　中津　勇仁（北郷小学校）
音楽室の日曜日　後藤　彩綾（吾田小学校）

【小学校四年生】

よだかの星　日髙　琴音（飫肥小学校）
でんでん虫の悲しみ　川﨑　柚華（吾田小学校）

【小学校五年生】

ドラキュラばーちゃん　増田　姫和（飫肥小学校）
ダイナソー・パニック（まいごのよろい竜）　橋本　塁（潟上小学校）

【小学校六年生】

生命の木　林　里紗（潟上小学校）
絶望鬼ごっこ　中村　桜乃祐（油津小学校）

読書感想画の審査を終えて

今年も、読書感想画コンクールにたくさんの作品が寄せられました。子ども達は、わくわくしながら選んだ本を読んだ後、その感動を絵で表現しようと、画用紙を前に想像の翼を広げて腕をふるう時間を楽しんだことでしょう。とても良い体験になったと思います。

低学年の皆さんの絵は、登場人物が、大きく元気いっぱいに描かれている作品が目立ちました。絵を見ていると思わず笑顔になってしまうような楽しい作品ばかりでした。小学校に入って、クレヨンや絵の具の使い方が上手になっているなぁと思いました。

中学校の皆さんの絵は、登場人物が複数になり、周りの情景まで書き込んである作品が増えました。動きがダイナミックで、時間をかけて丁寧に仕上げた作品になっていました。登場人物の表情が生き生きとしていたことも心に残りました。

高学年の皆さんは、混色や遠近法などの技法が使われていました。人物や物との関係がよく考えられて描かれており、絵に空間の広がりや奥行きを感じました。

今回は、全体的にレベルが上がっており、子ども達の絵を描く力が向上しているのを感じました。長年、感想画コンクールを主催してくださる市立図書館の皆様の御努力が実を結んだものと感慨深い気持ちになりました。

審査員氏名一覧

土肥　華子	飫肥小学校	永友　智子
三角　順子	飫肥小学校	片岡　佐優梨
甲斐　亜希子	吾田小学校	金丸　千鶴子
中武　和子	桜ヶ丘小学校	大田　裕子
木原　みのり	細田小学校	橋本　佳代子
田爪　里香	吾田東小学校	石井　祥子
秋岡　裕子	南郷小学校	小林　直子
百野　まるみ	福島小学校	松元　久恵
後藤　美香	有明小学校	宮田　美奈子
世良田　ゆかり	金谷小学校	清田　しのぶ
大久保　規子	大東小学校	日高　藍
谷口　由貴	大平小学校	外林　義朗
武田　智恵美	本城小学校	市原　美由紀

市木小学校	鵜戸小学校
都井小学校	北郷中学校
飫肥中学校	北郷小学校
油津中学校	串間中学校
吾田中学校	榎原中学校
細田中学校	南郷中学校
吾田中学校	

平成３０年度
日南市読書感想文・読書感想画コンクール入賞作品集
第１０集

平成３０年１２月発行

発行　　日南市教育委員会　生涯学習課
日南市中央通１丁目９番７号
編集　　日南市教育委員会　生涯学習課図書館係
日南市飫肥２丁目６番１８号
電話（０９８７）２５－０１５８